

JHS インタビュー

すずきゆう

鈴木優 (東京交響楽団ホルン奏者)

2016年7月21日 台東区内某所にて
(インタビュー・文:伴野涼介)

【クラリネットを吹くために生まれたのかも】

— さて、今回は今年の3月に藝大フィルハーモニア（以下藝大フィル）から東京交響楽団に移籍したばかり、今をときめくフレッシュな新世代のホルン奏者、鈴木優さんにお話しを伺います。よろしくお願ひします。さて、何から聞こうか迷いましたがここは定石どおりに音楽・ホルンとの出会いからお聞きしたいと思います。

鈴木 よろしくお願ひいたします。ええと、まず小学校の6年間は柔道をやっていた、というかやらされていました。父が先生で。それなりに頑張ってはいたのですが、一刻も早くやめたいと6年間思っていたんです。でも父は怖くて逆らえないので(笑)、なにかやめるきっかけというのを探していました。小学校高学年から実はクラリネットに憧れを持っていて、中学に入る時がいい機会で「吹奏楽部に入るので柔道はできません。」と言えると思って吹奏楽部に入部しました。

— クラリネットのどのへんに憧れていたのでしょうか？

鈴木 …シルエットが(笑)。夢にまで出てきました。クラリネットを吹いている自分が。「私はクラリネットを吹くために生まれたのかも知れない！」と思うくらい惹かれていきました。

— クラリネットも似合いそうですね(笑)。どこかでクラリネットの演奏を見たり聴いたりしたんですか？

鈴木 小学校にも吹奏楽部はあったんです。そこで同級生とかが吹く姿を見たりして…。

— すると、自分で何か演奏することとかはあまりなかったのですか？

鈴木 いえ、ピアノをちょっとやってはいましたが…。でも柔道の比率の方が全然多かったですね。

— なるほど。お父さんはさぞかしがっかりしたかもしれません、もし柔道を続けていたら、場合によってはそろそろ始まるリオデジャネイロオリンピックに出場していたかも？

鈴木 あはは。父はどうやらそうしたかったみたいで。



- では、中学に入ってクラリネットを始めたのですか？それとも、まさかのホルンに？
- 鈴木） そうなんです。…あんなにアピールしたのに…。部員が全体20人くらいと少なかつたんです。私の学年も6人だけで。その中には小学校からやっている子もいました。体験入部というか楽器体験があったのですが、私はクラリネットにしか行かなかつたんです。するとそれを見かねた先輩がホルンのところにも連れて行ってくれたのですが、一音も、一瞬も、バズィングの「ブッ」で音すら出ませんでした。「私はホルンに向いてないですよー」っていうところもアピールしたんですが…。
- アピールしたというと、音を出せるのに出さなかつた？「まずい、このままだと吹けてしまう！」とか。
- 鈴木） いえ(笑)本当に1ミリも音が出なくて、「こんなに向いてませんよー」って感じでした。それでも経験者の同級生がクラリネットパートになってしまい、人が少なかつたので私はホルンパートになってしまいました。人生初めての挫折でしたね。打ちひしがれました。でも、「いいよー、ホルン似合ってるよー」と先輩たちからおだてられているうちに「あー、そなんだー」と心がホルンに傾いていきました。単純なので。
- 中学3年間吹奏楽をやり、高校に進学してもホルンを続けていたわけですよね。やはり進学先は吹奏楽部の様子で決めたりしたんでしょうか？
- 鈴木） いえ、中学の時に高校の顧問の先生がレッスンにいらしてて、その先生が元新星日響のホルン奏者だった方で、「プロを目指すんだったらうちの高校を推薦してあげるのでおいで」と言ってくださって…。
- 高校受験の時点ではプロになろうということだったんですか。その先生は「この子はプロになるべきだ」と思っていたんでしょうか？
- 鈴木） 先生はそう考えてくださっていたようですが、私は「プロってなんぞ？」という状態で、とりあえず推薦ということが嬉しくて、ふたつ返事で「ぜひ～」という感じでした。
- 高校はたしか高校野球でも有名になった高崎健康福祉大学高崎高校（健大高崎）でしたよね。「機動破壊」の。独特な校歌も印象的ですが、吹奏楽部も盛んな学校だったですか？
- 鈴木） 皆和気あいあいと、楽しんでやるという感じでした。コンクール強豪校というわけではなかったです。部活のあとには個人練習もできたり。顧問の先生も「プロを目指すなら、吹奏楽の強豪校に行くよりも自分の練習ができるが環境が良いのじゃないか」と考えて声をかけてくださいました。部活の練習で精一杯ということもなく、のほほんとやっていました。
- たしか高校生のころから東京フィルの高橋（臣宜）さんに習っていましたが、いつからどういうきっかけで？
- 鈴木） それも顧問の先生…武蔵野音大を卒業されて新星日響に15年ほどいらっしゃった吉田宏明先生に紹介していただいて。高校1年生の時に、当時はまだ高橋先生が群馬交響楽団に在籍なさっていて、学校までいらっしゃって個人レッスンもパートレッスンもしてもらっていました。高橋先生が東フィルに移籍されてからは私が東京までレッスンを受けに通っていました。高校に入学して比較的すぐにレッスン受け始めましたが、高校は3年間しかなく東京藝大入試までは時間がないので、吉田先生も一刻も早くレッ

スンを、と思っていたようです。

— ということは高校に入った時点で東京藝大を狙っていた？

鈴木）私は最初「藝大って大学があるんだ…」という感じだったのですが、高橋先生も藝大をご卒業しているということもあり…進路が固まっていきました。

— 高橋先生にはどのようなレッスンを受けましたか？

鈴木）エチュード、そして基礎を中心にしっかりやるという感じです。コープラッシュとほかのエチュードを毎回レッスンで見てもらっていました。東京藝大を受験したいとお伝えしていましたが、今考えてみると、藝大に入るためではなく、オーケストラに入ってプロでやっていくためのレッスンを高校1年生の時点でしたくていたんだな、と思います。

— なるほど。ところで、いろんなところで質問されていると思うので、聞かなくてもいいかなー、とも思うのですが、You Tubeにアップされているシュトラウス第1番のことについて触れたほうが良いのでしょうか？

鈴木）どちらでも大丈夫です。私も慣れていますので(笑)。

— あれはちょっと話題になりましたよね。たしか伴奏が群馬交響楽団で…高橋先生とは共演できたのでしょうか？

鈴木）高橋先生はすでに東フィルに移籍なさっていたので、残念ながら。あれは私が高3の時で、NHKの「あなたの街で夢コンサート」という番組でした。アマチュアの方の夢を叶えよう、という企画で。たまたま私に声がかかって…本当に良い機会をいただきました。オーケストラとの共演ももちろん初めてで。ちょうどそのころ群馬県のソロコンクールがあって、同じ曲をピアノ伴奏とではやっていましたが。オーケストラとのリハーサルは緊張してボロボロで、オーケストラの方々も心配されていたと思います。「この子大丈夫かなあ？」って。緊張で緊張で…。本番は照明がとても強くて、客席が一切見えなかつたんです。それで少しリラックスして吹きました。本当にすごい照明だったんですよ！！

【練習しすぎて調子を崩してしまい…】

— そして見事東京藝大に合格し、入学後は守山先生につくことになるわけですが、それまでに守山先生のレッスンを受けたことはありましたか？

鈴木）はい。それもなんと、高校までいらっしゃってくださいって。今考えたらすごい話ですよね。コーパラッシュなどを見てもらいました。大学に入ってからは守山先生が退官なさるまで、2年間教えていただきました。

— 藝大に入っていたかがしたか？環境についてや、印象深かったことがあれば。

鈴木）いやー、本当にカルチャーショックで、「こんなにホルンが上手い人がたくさんいるんだ！」と思いました。衝撃的でした。一気に焦りましたね。「自分が一番遅れている。練習しなきゃ、練習しなきゃ」と思った結果、練習しすぎて調子を崩してしまい、守山先生に諭されました。「もっと効率の良い練習しないとダメだよ」と。大学1年生の時は授業以外何も予定がなくて暇でしたし、夜の11時まで練習してたこともありました。高い音もぜんぜん出なくなっていました。守山先生に「コンディションを整えることも練習なんだよ」と言っていただき、考え直して練習するようになったら持ち直

していました。中学、高校の時は練習時間が多かったので「とにかく練習すればいい。」と、闇雲にしていたのだとその時思いました。調子を崩すということが実感として一切なかったので、大学に入ってから「なんでこんなにたくさん吹いているのに調子が悪くなるんだろう」って思ってたんです

- 野球のピッチャーが連投しすぎて体を壊してしまうようなことですね。管楽器だと「肘が！…」というようにはっきりしているわけでもなく、分かりにくい部分もありますし。

鈴木) そうなんです。練習しすぎの悪循環から抜けられたら、自分のペースもつかめきました。

- そのほかに、自分への影響が大きかった出来事など、ありますか？



鈴木) 大学3年生頃からちょこちょことプロのオーケストラからエキストラの声をかけていただくことがあったのですが、「こんなにもプロって違うのか」とすぐに実感しました。もちろん大学で先輩方とアンサンブルをやる時にも感じていましたが。プロの方とオケの曲をご一緒させていただくことで分かることがすごく多くて…それも衝撃でした。

- オーケストラにはいわゆる下吹きとして入っているわけですが、もともと下吹きになろうと？

鈴木) 高橋先生からは「鈴木は下吹きになる方がうまくいくだろう」と言われていました。上吹きも下吹きもよく区別のつかない頃だったので、「あー、そうなんだー」くらいに思っていて、その頃からノイリングの下吹き用のエチュード

などもやっていました。大学に入ってからも自然と下のパートを任せられることが多くなっていました。

- では下吹きになっていくなかで、オーケストラのオーディションも下に集中してうけていたんでしょうか？それとも上吹きのオーディションも受けたことはありますか？

鈴木) 上吹きのは1回も受けたことがないですね。下だけです。最初は仙台フィルを受けて、群響、読響、名古屋フィルも受けましたし、東響も以前に1回受けていました。下吹きのオーディションがちょうどタイミング良くたくさんありましたね。

- 藝大フィルに合格したのはいつ頃ですか？オーディションの手ごたえなんかもまだ覚えてますか？

鈴木) 大学4年の卒業直前でした。当時は試験期間がなかったので卒業してすぐの2014年4月に入団しました。タイミングに恵まれました。オーディションのことはけっこう覚えていますね。「あそこ音ハズしたなあ」とか(笑)。今自分ができることは全部できたな、という曲と、あちゃー、という曲の差があったので、受かるとは全く思っていなかったです。オーディション独特の空気感に慣れなかったのですが、ありがたいことにタイミングよく、コンスタントにオーディションを何回か受けられたので、そのなかで自分の精神状態をつかめるようになっていたかな、と思います。1年とちょっとの在籍でし

たが、藝大フィルではコンチェルトをやることが多いので、大学を卒業したてでたくさんのコンチェルトを演奏する機会に恵まれとても良い経験をさせていただきました。

- そして東京交響楽団のオーディションを受けて、見事合格したと。試験期間も無事乗り越えて東響のホルンセクションの一員となってみて、なにか感じるものはありますか？

鈴木） エキストラでお世話になっていた時にも感じたことですが、皆さん演奏は言うまでもなく素晴らしいのですが、忙しいスケジュールのオーケストラであるにもかかわらず、コンディションの保ち方やオケの雰囲気など忙しさを感じさせない方ばかりで。それは凄いことだと思います。私もそうでありたいと常に思っています。

- 東響のオーディションはどのような感じだったのでしょうか？聞いた話によると、R. シュトラウスの「英雄の生涯」のオーケストラスタディが素晴らしいと、特に低音が凄まじくて聴いていた楽員さんたちがざわめいたんだとか。

鈴木） 私は「なにかやっちゃたんだ」と思っていましたが(笑)そのように思っていただけていたことを後に知りました。ありがとうございます。オーディション全体的には、自分がやれることはやれた感じでしたが、手ごたえは全然なかったので、「今回もいい経験したな。また次頑張ろう。」と思っていました。

- 東響に入ってまだ日は浅いですが、印象的な演奏はありましたか？指揮者やソリストなど。

鈴木） はい。たくさんいますが、特に音楽監督であるジョナサン・ノットさんが素晴らしい、こんなに幸せなことはないだろう、と思いながら吹いています。先日のブルックナーの交響曲第8番も本当に素晴らしい演奏でした。

- 東響では2番ホルンと4番ホルンのどちらも担当しますか？それともどちらかだけ？

鈴木） どちらもやります。今は比率として2番の方がちょっとだけ多いですけど。下吹きは4人いるので、なるべく出番が均等になるようにローテーションしています。オーケストラのスケジュールが忙しいので、出番を間違えてしまわないかが恐怖です(笑)

【教えていただいたことを後輩たちに伝えられるような人間・奏者に】

- 最近では「Cor Ensemble VENUS（ヴィーナス）」のメンバーになっていますし、先日は「ホルン広場」の演奏会でご一緒しました。それから金管五重奏では韓国のチェジュ国際コンクールで優勝していますよね。オーケストラ以外にも活動する場がどんどんできてきてていると思いますが、どのような活動をしていますか？

鈴木） 機会に恵まれました。ありがとうございます。ヴィーナスは純粋に凄く新鮮です。職場が男性が多いこともありますし、増えてきてはいますけどオーケストラ全体としてみると女性ホルン奏者は少ないですし。それから、組んでいる金管五重奏は「メナジェリー・ブラスクインテット」といいまして、藝大の室内楽の授業で組んでいたグループなのですがせっかくの機会だから活動を続けよう、ということになりました。続けていくにあたってコンクールも受けてみよう、ということでチェジュのコンクールを受けたところ、ありがたいことに1位をいただくことができました。受賞のご褒美で演奏の機会をいただけたので来月にゲストとして韓国に行くことになっています。活動のモチベーションにもなるので、今後もコンクールを受けようという話をしています。定期的な

活動としては年に1回は自主公演を行えたら...という感じです。

— 今後の活動の予定や将来の野望を教えていただけますか？

鈴木) 今はひとつひとつの目の前の仕事全力でやるということを考えています。将来的には私が先生方や先輩方に教えていただいたことを後輩たちに伝えられるような人間・奏者にならなければ、と思っています。

— では、音楽以外でやってみたいことや興味のあることはなんですか？ご趣味など。

鈴木) 趣味はお笑いのライブに行くことです。「今日は暇だな」と思ったら調べて、面白そうのがあったら行きます。たまに友達とも。息抜きですね。

— おお、お笑いとは意外な。今イチオシの芸人はいますか？

鈴木) "サンシャイン池崎"がめちゃめちゃ面白いのでぜひ皆さんに見て欲しいです(笑)。お笑いのほかには食べることも好きです。おいしそうなお店を調べるのが好きで、リストをつくります。お酒も好きですが、お酒のおつまみがすごく好きで、浅草の"ホッピー通り"でハシゴしたいなー、という夢もあります。それから車の免許をとりたいです。実家に帰ると車がないとどこへも行けないというのもありますが、サービスエリアを食べ歩きでまわりたいという夢があるのですが、電車では無理じゃないですか。食べるためには車がいるんです。北海道に行った時に行きたいお店があったのに、電車では行けなくて断念したこと也有ったので。

— 食べるのが趣味で、車も持ってしまうと危ないですね。運動もしないと、ですよね。

鈴木) 矛盾していますが、ダイエットも趣味なんですね(笑)。趣味というか、食べる趣味のための趣味なのですが(笑)

— 今はどんなダイエットにとりくんでいますか？

鈴木) 「おかわりしないダイエット」です！！(笑)。



鈴木 優 SUZUKI, Yu

群馬県出身。東京藝術大学卒業。小澤征爾音楽塾オペラプロジェクトXIに参加。2014年ヤマハ新人演奏会に出演。また、Menagerie Brass QuintetのメンバーとしてJTアートホールアフィニスにて期待の音大生によるアフタヌーンコンサート、第39回室内楽定期演奏会に出演。第10回チェジュ国際金管楽器コンクール金管五重奏部門第1位を受賞。

これまでにホルンを高橋臣宜、守山光三、日高剛、西條貴人、伴野涼介、五十嵐勉の各氏に師事。Menagerie Brass Quintet、Cor Ensemble VENUS、The Horn Square各メンバー。

東京藝術大学管弦楽研究部非常勤講師（芸大フィルハーモニア ホルン奏者）を経て現在、東京交響楽団団員。

使用楽器：アレキサンダー 103MBL

使用マウスピース：Original E.Schmid 85